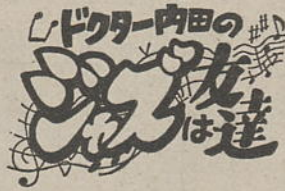


生演奏に新鮮な感動

「峰原介 板橋文夫 井野信義 村上寛」のグループが生まれたのは、およそ一年ほど前である。その間、僕は東京や名古屋で、何度もその生演奏を聴くことができたが、その度に、背中がぞくぞくとするような新鮮な感動に、ふるえを



えも感じてしまっただ。彼らの演奏は、常に前進し、創造して止まることなく。つまり僕らにとっては、毎回が「未知の体験」なのではないか。

「それほどすごいんじゃない。せいぜいCDが聴きたいものだが……」。そんな声が聞こえてくるようにだけれど、

演奏会のたび未知の体験 世界に通用する伊藤君子

実力ナンバーワン

聞かす言えは、以前こんな

不思議なことにまだレコードがない。ついつい「いつかレコード会社は何してるんだろっねえ」なんて思ってしまう。

とがあった。伊藤君子というクラブで、堂々と胸を張って名は、今では実力ナンバーワン出演できる日本の歌手なんのジャズシンガーとして広て、そう多くはない。その伊に、ニューヨークのジャズ 超して初めてのリサイタルを



実力ナンバーワンとして広く認められているジャズシンガーの伊藤君子

開いたとき、求められた僕はプログラムのこころ書いた。その一部は――。

「おそらく、彼女は華やかなスポットを浴びたことにはなかつたような気がするけれど、その実力の確かさは「知た僕は驚いた。天衣無縫のする人ぞ知る」だ。そんな彼女に、今時レコードもないなんて信じられない話だが、それはそれでよい。力をいっぱい蓄えた息の長い人になってほしいから。とはいえ広い東京のこと、耳のあるディレクターがいらないはずがない。扉は必ず開かれる。そして今夜は、そんな足がかりの二つになるのかな? (以下略) 別にこの文章に効きめがあったわけでもないけれど、それから間もなくレコードデビューし、以後毎年一枚のペースで、世界に通用するすぐれたアルバムを出し続けている。とは言うものの、このレコードに関して、日本のジャズメンにとっての厳しい状況は、あまり変わっていないように見え。

ジャズのたいこ味

これこそが即興音楽としてのジャズのたいこ味なんだねえ。とは言え、長い長い経験と修練と才能あつてのことばかりであらまへ。板橋、村上ともに渡辺貞夫グループの出身。井野は毎年ヨーロッパに招かれて、あちらのジャズファンにも高く評価されている男。そして峰はといえは、デビュー間もない新人のころ、うわさを聞いて一緒に出かけた渡辺貞夫が僕にさざやいた。その言葉は今でも忘れない。「いつか俺(おれ)を抜く存在になるかもしれない」

天衣無縫のすてきな

お話をもちとして、あれは去年の秋のこと。ドラムの村上に出演したときのテープだ。期待に胸躍らせて聴いた僕は驚いた。天衣無縫のする人ぞ知る。村上は言う。「うしろで叩(たた)いていて、一体どうなっちゃうんだろっ、狂ったんじゃないだろうなあなんて思っていましたよ」

(内田 修)